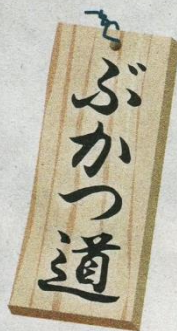


南陽高・女子バスケット部（名古屋市港区）



キュツ、キュツと小気味よいシューズの音を響かせながら、部員たちが体育館のゴールにシュートを決めていく。

一、二年生の計十六人が所属。平日の放課後は毎日、土日も練習に励む。練習メニューなど部員の自主性に任せた運営が特長だ。

数年前までは、公式戦で一勝するのがやっとの弱小チームだった。だが、昨年十月末には全国高校バスケットボール選手権大会（ウインターカップ）の県大会で、初となる十六強入りを

潜在能力開花 自分の成長楽しい



元氣よく練習に励む部員ら
＝名古屋市港区の南陽高で

の経験が豊富な同高の常勤講師が部活のコーチとして加わったこと。試合展開など戦術的な助言をもとに、部員たちが勝利に必要なチームワークを確立していったという。

磯部教諭は「もともと潜在能力の高い生徒が多く、コーチのおかげで実力を引き出すことができた」と分析する。主将の二年、泉采伽さん（も）は「自分の力が伸びていくのが楽しい」と話し、「試合に勝った時の快感は格別。これからも勝ちにこだわっていきたい」と笑顔を見せた。

果たすことができた。

「正直、ここまで勝てるとは思わなかった」と、顧問の磯部真輝教諭（ま）は喜ぶ。きっかけは昨年四月、バスケットボール

（池内琢）